

訳者はじめに

本書は、著者、Michael Greenacreが欧州を中心に展開しているセミナーのテキストとして執筆されたもので、初版（1993）、第2版（2007）を経て大幅に修正、加筆された第3版（2017）の翻訳書となる。

「はじめに」にもあるように、著者は Jörg Blasius とともに、CARME（Correspondence Analysis and Related MEthod：対応分析と関連技法に関する国際会議）を組織してきおり、その Web サイトには、本書で用いられているデータ・セットと R のサンプル・スクリプトが提供されている。

世界各国での、それも様々な領域の実務家、研究者を対象としたセミナーで使われてきただけあって、各章の記述は簡潔である。また理解の確認を可能とするデータとスクリプトを提供することによって、文字通りの実践書となっている。

全体は、以下のように大きく 5 つの部分から構成されている。(1) まず、第 1 章～第 9 章で、対応分析（CA）に関する基本的な概念が説明、第 10 章でそれぞれデータとして特徴を持った 3 つのデータセットを例としてまとめが行われている。(2) 第 11 章～第 15 章で、対応分析について数理的にも踏み込んだ特徴が解説される。そして、第 16 章、第 17 章とそれまで 2 変数のデータを対象として説明されていた対応分析（シンプル CA）を多変数に拡張するための試みが説明されている。これを踏まえて第 18 章では対応分析の多変数版である「多重対応分析（MCA）」を説明。続く第 19 章は、MCA の困難である説明パーセンテージが極めて低く表示される問題への対処及び説明慣性の調整が説明されている。(3) (1)、(2) を踏まえ、第 20 章からは CA、MCA の応用編として、分析対象であるデータ形式の拡張、コーディングの技法の説明が続く。(4) 最終の第 29 章、第 30 章では、従来「対応分析では扱えない」とも言われてきた統計的推定の問題が、並び替え検定を中心に扱われている。(5) 付録には、数理解説、R による計算の実例編、用語集、文献表、そして最後に今後の課題を含めたエピローグが掲載されている。

本書は、基礎をしっかりと固め、応用のために必要な数理を整理し、将来への展開も展望できる構成を持つ対応分析の基本文献とも呼ぶべきものとする。

2020 年 10 月

藤本 一男